コミュニカティブな英語指導は定着したのか
若手教員とベテラン教員の実態と意識から

林　宣之

１．はじめに

変化の激しい今の時代は、「Society 5.0」や「VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）の時代」等、様々な用語で表現されている。「グローバル社会」もそのうちの一つである。インターネットをはじめとしたデジタル・テクノロジーが高度に発達した現代社会では物理的にも時間的にも文字通り地球は狭くなったのである。そうした背景から、様々な文化と言語をもつ多くの人々と交流するために、好むと好まざるとに関わらず、国際共通語としての英語のプレゼンスは一層高まっていると言える。ここに英語によるコミュニケーション能力（communicative competence）が求められる所以がある。しかしながら英語教育において、コミュニケーション能力の重要性が認められるようになったのは実は最近のことではない。学習指導要領に初めて「コミュニケーション」という言葉が登場したのは1989年のことである。それから35年が経過した現在、どこまで児童・生徒のコミュニケーション能力は育成されたのであろうか。また児童・生徒のコミュニケーション能力の育成のためには、英語教師がコミュニカティブな授業を行う必要があるが、この35年で英語の授業はコミュニカティブになったのであろうか。

白井（2015）は、外国語教育においては、コミュニカティブ・アプローチ（Communicative Approach; CA）をはじめとしたコミュニカティブな外国語教育が世界的な潮流となっているが、日本では今だもって旧態依然とした文法訳読式を擁護する議論が見られるとし、CA が浸透しているとは言えないとしている。また筆者は本学の英語科教育法の授業において、学生にコミュニカティブ・ランゲージ・ティーチング（Communicative Language Teaching; CLT）を指導しているが、学生の多くがこれまでにそのような授業を受けたことがないと述べていることから、中学校や高等学校における CLT の普及率もそれほど高くないことがうかがわれる。

白井（2015）は、CA（ここでは CLT も同義）においては、言語学習のゴールをコミュニケーション能力をつけることととらえ、そのために教室内活動を外国語を使ったコミュニケーション活動（学習指導要領では「言語活動」）を中心とし、「目標」と「活動」が言語を使った意思伝達にあるとしている。一方、伝統的に日本でも世界でも行われてきた文法訳読式は、これに当てはまらず、その結果、英語を何年も勉強しても使えるようにならない学習者を大量に生み出してきたと断罪している。さらに藤田（2015）は、コミュニケーション能力の育成を目指した英語教育に対する根強い反対論が世間や英語教師の間にある理由として、「CLT では文法が身に付かない」、「CLT は薄っぺらなおしゃべりの授業だ」、「教えるのはネイティブでなければならない」などの CLT に対する誤解があるとしている。

筆者はこれまで本学の授業をはじめとして、東京都内、埼玉県内の自治体、小中学校における研修会等で CLT の一層の普及に努めてきているが、現場の英語教員はコミュニカティブな授業についてどのように受け止めているのか、本稿では考察してみたい。

２．学習指導要領におけるコミュニケーション能力

現場の英語教員の実際を見てみる前に、英語教員の考え方の基盤となる、現行の学習指導要領におけるコミュニケーション能力の考え方について触れておく。前述のように、現在の公立学校における英語教育の基本的な考え方は「コミュニケーション重視」、すなわち「コミュニケーション能力の育成」をその目標としている。以下に中学校学習指導要領解説外国語編（2017）におけるコミュニケーションの考え方を何点か抜粋する。（下線はいずれも筆者）

・グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上

が課題となっている。
・中学校においては、小学校における外国語活動の成果として、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成され、「聞くこと」及び「話すこと」の活動を行うことに慣れているといった変容が生徒にみられること等も踏まえ、授業における教師の英語使用や生徒の英語による言語活動の割合などが改善されてきている。
・一方、授業では依然として、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある。また、生徒の英語力の面では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどに課題がある。

現行の学習指導要領に示される外国語科の目標には「コミュニケーション」という文言が繰り返し使われ、特に強調されていることが分かる。（下線はいずれも筆者）

第１　目標
外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
(1) 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。
(2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

ここでは中学校学習指導要領を示したが、こうしたコミュニケーション能力の育成を目指す外国語教育の目標については、難易度の差こそあれ、小学校外国語活動、小学校外国語科から高等学校外国語科まで一貫して同様である。

３．調査対象と方法
調査は 2023 年 12 月から 2024 年１月にかけて、調査用紙に回答する形式で実施した。また 2024 年７月までに、回答した内容に基づき、順次、インタビュー調査を行う予定である。
調査内容は中学校英語教育に関する実態調査及び意識調査として、実態調査は文部科学省実施の「令和４年度公立中学校における英語教育実施状況調査（以下、「実施状況調査」という）」からの抜粋９問を、意識調査は自由記述式の 19 問を実施した。
被調査者は英語教育キャリアの異なる、調査者と英語教育上関係のある４名を選抜した。被調査者の背景は以下のとおりである。

被調査者 A
・英語教員を目指す高等学校３年生　女性
（４年制大学英語教員養成課程への入学が内定している）
・実用英語技能検定２級
・海外留学経験なし
被調査者 B
・４年制大学英語教員養成課程３年生　女性
（東京都中高英語教員採用試験に一次合格している）
・実用英語技能検定２級
・海外留学経験なし
被調査者 C
・都内公立中学校英語科教諭　女性
・教職歴　３年
・４年制大学教育学部教育学科中高英語教職課程卒業
・TOEIC　805 点
・海外留学経験　半年以上１年未満

被調査者Ｄ
・都内公立中学校英語科指導教諭　女性
・教職歴　22 年
・４年制大学文理学部英米文学科　卒業
　専攻領域　英語音韻論・音声学
・国連英検Ａ級
・海外留学経験　１か月以上半年未満

本稿ではこれらの４名の被調査者のうち、被調査者Ｃ及び被調査者Ｄを、それぞれ若手教員及びベテラン教員として、特にコミュニケーション能力の育成に関わる質問への回答について取り扱うこととする。

４．実態調査の結果

(1)　生徒が英語で言語活動をしている時間の占める割合（%）

＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
第１学年　50%～75%
第２学年　50%～75%
第３学年　50%～75%
＜若手教員＞
第１学年　25%～50%
第２学年　25%～50%
第３学年　25%～50%
＜ベテラン教員＞
第１学年　50%～75%
第２学年　50%～75%
第３学年　50%～75%

(2)　生徒が英語で言語活動をしている時間を 10 とした時、「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」及び「書くこと」にかける時間の割合

＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞

第１学年	「話すこと［やり取り］」	3
	「話すこと［発表］」	2
	「書くこと」	2
第２学年	「話すこと［やり取り］」	3
	「話すこと［発表］」	2
	「書くこと」	2
第３学年	「話すこと［やり取り］」	2
	「話すこと［発表］」	2
	「書くこと」	2

＜若手教員＞

第１学年	「話すこと［やり取り］」	4
	「話すこと［発表］」	2
	「書くこと」	4
第２学年	「話すこと［やり取り］」	3
	「話すこと［発表］」	3
	「書くこと」	4
第３学年	「話すこと［やり取り］」	2
	「話すこと［発表］」	3
	「書くこと」	5

＜ベテラン教員＞

第１学年	「話すこと［やり取り］」	7
	「話すこと［発表］」	1
	「書くこと」	2
第２学年	「話すこと［やり取り］」	3
	「話すこと［発表］」	2
	「書くこと」	2
第３学年	「話すこと［やり取り］」	6
	「話すこと［発表］」	3
	「書くこと」	4

(3)　パフォーマンステストの実施

＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
第１学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
第２学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
第３学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
＜若手教員＞
第１学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
第２学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
第３学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
＜ベテラン教員＞
第１学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
第２学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施
第３学年　スピーキングテストとライティングテストの両方実施

(4)　実施したスピーキングテストの上位３つ

＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
第１学年　① インタビュー（面接・対話等）
　　② スピーチ

③ プレゼンテーション
第２学年　① インタビュー（面接・対話等）
② スピーチ
③ プレゼンテーション
第３学年　① インタビュー（面接・対話等）
② スピーチ
③ プレゼンテーション
＜若手教員＞　総実施回数　12 回
第１学年　① インタビュー（面接・対話等）
② スピーチ
② プレゼンテーション
第２学年　① スピーチ
① プレゼンテーション
第３学年　① プレゼンテーション
② インタビュー（面接・対話等）
② スピーチ
＜ベテラン教員＞　総実施回数　14 回
第１学年　① インタビュー（面接・対話等）
① スピーチ
第２学年　① インタビュー（面接・対話等）
② スピーチ
② プレゼンテーション
第３学年　① インタビュー（面接・対話等）
② プレゼンテーション
③ スピーチ

(5)　授業中における自分の英語の発話量（%）
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
第１学年　50%～75%
第２学年　50%～75%
第３学年　50%～75%
＜若手教員＞
第１学年　50%～75%
第２学年　50%～75%
第３学年　50%未満
＜ベテラン教員＞
第１学年　50%～75%
第２学年　50%～75%
第３学年　50%～75%

(6)　ALT との活動の実施割合（%）
ア　やり取り・発表のモデル提示
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
75%以上の授業
＜若手教員＞　50%～75%の授業
＜ベテラン教員＞　75%以上の授業
イ　パフォーマンステストの補助
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
75%以上の授業
＜若手教員＞　75%以上の授業
＜ベテラン教員＞　75%以上の授業
ウ　生徒のやり取りの相手
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
75%以上の授業
＜若手教員＞　75%以上の授業
＜ベテラン教員＞　75%以上の授業
エ　発音のモデル・発音指導
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
75%以上の授業
＜若手教員＞　75%以上の授業
＜ベテラン教員＞　75%以上の授業
オ　生徒の活動のフィードバック
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
75%以上の授業
＜若手教員＞　75%以上の授業
＜ベテラン教員＞　75%以上の授業

(7)　ICT 機器の活用の実施割合（%）（言語活動に関するものを抜粋）
ア　パソコン等を用いた発表ややり取り
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
１%～25%の授業
＜若手教員＞　０%
＜ベテラン教員＞　25%～50%の授業
イ　生徒が電子メールや SNS を活用した授業
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
０%
＜若手教員＞　０%以上の授業
＜ベテラン教員＞　０%以上の授業

(8)　ICT 機器を活用した遠隔地との交流の実施状況（回）（言語活動に関するものを抜粋）
ア　遠隔地の生徒との英語での交流
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
０回
＜若手教員＞　年１回以上
＜ベテラン教員＞　０回
イ　遠隔地の英語の堪能な人との個別交流
＜実施状況調査（最も多く選択されたもの）＞
０回
＜若手教員＞　年１回以上
＜ベテラン教員＞　０回

５．意識調査の結果

(1)　英語教員にとって最も大切な資質は何だと思いますか。

＜若手教員＞

コミュニケーション能力。

＜ベテラン教員＞

常に学び続ける姿勢。今求められている英語教育に対して挑戦し続けていく姿勢を持つこと。

生徒と英語を介してやり取りを楽しむ、楽しもうとする姿勢。

英語教育を楽しむ姿勢。

(2)　自分の英語の授業スタイルはどのようなものですか。

＜若手教員＞

明るくとにかく話す。

＜ベテラン教員＞

教室内での生徒の発言を受け止める、英語の授業を「楽しみ」にしてもらいたい、そんな思いが根底にあります。英語の学力をあげたいというよりは、楽しんでもらいたい、これが一番大事かなと思います。そう思ってもらえるような授業を作っていきたいです。

(3)　英語教師としての自分の強みは何だと思いますか。

＜若手教員＞

年齢が近い、英語が一番苦手だったため英語が苦手な子がどこでつまづくか、気持ちを理解することができる。

＜ベテラン教員＞

いろいろ勉強することは好きなので、あまり「苦」とは思いません。そんな自分の姿勢が、英語の授業でのアイディアにつながってきているのかなと思います。留まらず（現状に満足することなく）、絶えず挑戦を繰り返していけるように、学び続けていきたいです。

(4)　英語教師としての自分の課題は何ですか。

＜若手教員＞

英語力。

＜ベテラン教員＞

指導教諭なので、広く自分の実践を公開、もしくは話しに行けるといいのでしょうが、なかなか出張に行きづらい状況です。指導教諭軽減とかはないので。授業が勝負なので、授業を減らされても困るのですが。

(5)　これまでに英語教師としての転機のようなものがありましたか。あるならばそれはどのようなものですか。

＜若手教員＞

生徒に「先生、もっと授業で先生の英語多い方がいいと思う！」と言われた時。

＜ベテラン教員＞

本市に来る前は、自分の授業にある程度自信がありました。結構乱暴な授業でも、学習に対する姿勢が高い地域だったので、授業は成り立っていましたし、学力調査の結果もとても良かったので、勘違いしていたと思います。本市４年目育休明けで戻った時、２年生に入ったのですが、初めは全く授業を聞いてもらえませんでした。「授業は楽しくないと聞いてもらえない」と痛感しました。この頃から、授業研究をしっかりやらないと！という気持ちが強くなったと思います。

(6)　英語を指導していて、楽しいと感じる時はどのような時ですか。

＜若手教員＞

生徒同士が楽しく英語を話している姿を見た時。

＜ベテラン教員＞

生徒が英語を使っていろいろなことができるようになったなと実感する時。

生徒が「これ喜ぶだろうなー」と思いながら教材研究している時。

１年に１回ぐらいあるのですが、「領域展開」を感じるような瞬間。

(7)　英語を指導していて、大変だと感じる時はどのような時ですか。

＜若手教員＞

自分の英語力がないために、もっとやってあげたいことができなく苦しい時。

＜ベテラン教員＞

評価しなければならない時。成績をつけるのは大変。

(8)　中学校英語教師に必要な英語力とはどの程度ですか。

＜若手教員＞

TOEIC 920 ぐらいだと考えます。

＜ベテラン教員＞

生徒とのやり取りだけに限れば、英検３級程

度？の内容かな？とも思いますが、実際には、より深くより高い英語力が必要とされると思います。水泳ができない、鉄棒ができない体育の先生がイマイチなように、英語の先生も ALT との楽しいやり取りができる（見せられる、聞かせられる）くらいの英語力は必要だと思います。

また、生徒の発言に対する教師の応答、より良いやり取りが広がっていくことが「いい授業」のポイントだと思うのですが、これも教師の英語力に関わってくるのかなと思います。（場合によっては、リキャスト、リフレーズ、パラフレーズの絶好の機会となる）

教材研究も大事ですが、授業のシミュレーション（想定問答）を念入りにしていくことも重要だと思います。私の場合は、授業のシミュレーションが英語力を上げる一助になっています。

(9) ４技能５領域について、英語教師として必要な順位を付けてください。また、その理由を記述してください。

＜若手教員＞

① 話すこと［やり取り］
ALT や生徒とやり取りをしたり、そのモデルを見せることが多いから。

② 聞くこと
生徒や ALT、教科書音声が何を話しているか聞いてリアクションをする必要があるから。

③ 読むこと
授業をする上で、自分自身が英文を読んで理解する必要があるから。

④ 話すこと［発表］
毎回の授業はやり取りも含めて生徒に発表するようなものなので、発表力は自然につくと思う。

⑤ 書くこと
書く機会は板書以外にほとんどないから。

＜ベテラン教員＞

① 話すこと［やり取り］
② 話すこと［発表］
③ 聞くこと
④ 読むこと
⑤ 書くこと

※理由の記述なし

(10) 英語教師にとって特に必要な知識を３つ選んでください。また、その理由を記述してください。

【選択肢】
英米文学　英米文化　英語学　英語教育学
第二言語習得　国際時事　その他

＜若手教員＞

・ 英語教育学
どう教えたら生徒が英語に興味をもつことができるか、その方法を身に付けることが、一番教師が知るべきことだから。

・ 第二言語習得
どうしたら英語の力を身に付けられるか質問に来る生徒が多いから。

・ 国際時事
何のために英語を使うかわからない子たちにアイデアを提供することが大切だから。

＜ベテラン教員＞

・ 英米文化
・ 英語学
・ 第二言語習得

※理由の記述なし

(11) 学習指導要領解説はどの程度活用していますか。

＜若手教員＞

それほど活用していない。

＜ベテラン教員＞

読み込んでいます。指導案を書くときは必ず当たりますし、たまに振り返りもします。

(12) 教科書の教師用指導書はどの程度活用していますか。

＜若手教員＞

教科書の問題の答えを確認したり、指導のポイントを押さえたりする際に活用するのみ。

＜ベテラン教員＞

読みます。参考程度に。

６．考察

(1) 実態調査の結果から

コミュニカティブな授業とは、実際に学んでいる外国語が授業内で十分に使用されている授業ということである。英語の授業においては、英語教員が生徒に理解できる英語を十分に駆使して授業を行うとともに、生徒自身も英語による言語活動を十分に行なっている必要がある。

設問(1)「生徒が英語で言語活動をしている時間

の占める割合（%）」では、ベテラン教員の授業が実施状況調査（以下、「全国平均」と言う）と同じ割合であるのに対して、若手教員の割合は全学年においてそれよりも低い。設問(2)「生徒が英語で言語活動をしている時間を 10 とした時、「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」及び「書くこと」にかける時間の割合」から、全国平均、若手教員、ベテラン教員ともに、その言語活動の中心は「話すこと［やり取り］」であることが分かる。このことから若手教員は生徒との授業中の自然な英語でのやり取りにわずかながら苦労していることが窺われる。生徒に自然に英語を使用させることは、英語教員自身が英語を話すことよりもはるかに難しい。タスクやゲームなど、英語の使用を前提としないと解決しない課題を与えるなどの工夫が必要であろう。

一方、設問(5)「授業中における自分の英語の発話量（%）」を見てみると、第３学年を除いては、全国平均、若手教員、ベテラン教員の授業中の英語使用量に違いはない。しかしながら第３学年においては、若手教員のみ英語の使用量が少ない。このことは第３学年が中学校の最終学年であり、高等学校の受験のために対策をしなければならないことと関係しているものと思われる。文法事項のまとめや長文の読解など、指導しなければならない項目が多い上に、過去に出題された問題を解かせたりすることもあろう。経験の少ない若手教員の指導は、時に学習塾的な解説に終始してしまうこともあるのではないだろうか。指導法に悩みながら生徒と向き合う苦労が推察される。

設問(3)「パフォーマンステストの実施」及び設問(6)「ALT との活動の実施割合（%）」からは、若手教員、ベテラン教員ともに ALT を十分に活用しながら、普段の授業における生徒との英語でのやり取りやパフォーマンステストまでしっかりと行なっていることが分かる。調査を行った自治体の中学校では ALT が全校常駐配置されているが、ALT の主たる役割は生徒との「即興的なやり取り」にあることを忘れてはならない。予定調和的な練習であれば必ずしも英語話者である必要はないのである。

一方、設問(7)「ICT 機器の活用の実施割合（%）」及び設問(8)「ICT 機器を活用した遠隔地との交流の実施状況（回）」を見てみると、ICT 機器の活用については、若手教員、ベテラン教員ともにほとんどなされていない。しかしながら、全国平均も同様な結果であることを考えると、これは全国的な課題であるということができよう。ICT 機器を活用した調べ学習や、学習支援ソフトを用いての個別最適化された学習など、研究が進んでいる分野がある一方で、遠隔地との交流を始めとしたコミュニケーション活動への応用はまだまだ未踏であり、研究の余地があることが分かる。

(2)　意識調査の結果から

設問(1)「英語教員にとって最も大切な資質は何だと思いますか」に対して、若手教員は「コミュニケーション能力」と回答している。コミュニケーション能力の重要性は学習指導要領でも再三強調されており、経験の浅い英語教員が最初に不足を感じる部分であることは予想に難くない。また若手教員がここで回答しているコミュニケーション能力はもう少し広く日本語でのコミュニケーション能力も含んでいる可能性もある。その意味でも、生徒との信頼関係を築く上でコミュニケーション能力は教科を問わず、教員必須の資質であることは間違いない。

一方ベテラン教員は第一に、「学び続ける姿勢。今求められている英語教育に対して挑戦し続けていく姿勢を持つこと」と述べている。一定程度以上の指導力を身に付けたベテラン教員にとっては、個別の能力よりも、大きく変動する英語教育の世界で、現状に満足せずに挑戦し変化し続けることが大切であると考えている。このベテラン教員は「挑戦すること」の大切さについて、設問(3)「英語教師としての自分の強みは何だと思いますか」という問いに対しても、「いろいろ勉強することは好きなので、あまり『苦』とは思いません」とした上で、「絶えず挑戦を繰り返していけるように、学び続けて行きたいです」と回答している。一定以上の経験年数のある英語教員は、誰しも文法訳読式の授業からコミュニカティブな授業への大きな転換を経験している。そうした転換に乗り切れずに、旧態依然とした授業を続ける英語教員もいる中で、「挑戦」し「変化」し続けることの大切さを身をもって感じているものと推察される。

設問(5)「これまでに英語教師としての転機のようなものがありましたか。あるならばそれはどの

ようなものですか」に対して、若手教員は「生徒に『先生、もっと授業で先生の英語多い方がいいと思う！』と言われた時」と回答している。教員が初めて教壇に立つとき、何を拠り所にするかといえば、それは自分が今までどのように教わってきたかということになる。そうした意味では、先述のコミュニカティブな授業への大転換の前に英語教育を受けた世代もまた、変わらなければいけない世代だということができよう。その意味でも若手教員の英語教師としてのこの転機は興味深い。一方ベテラン教員は、若い時の自分の授業に対する自信は勘違いであったとし、異動を転機に「授業は楽しくないと聞いてもらえない」と痛感したこととしている。

設問(10)「英語教師にとって、特に必要な知識を３つ選んでください（選択肢省略）」では、若手教員は「英語教育学」「第二言語習得」「国際時事」を、ベテラン教員は「英米文化」「英語学」「第二言語習得」を選んでいる。２人に共通しているのは「第二言語習得」のみである。日々の指導の中で、学習に成功する生徒と失敗する生徒はそれぞれどうして生まれるのか、指導者の問題か、学習者の要因によるものか、またどのようにして生徒の動機付けを高めるかなどについて悩んだことのない英語教員はいないはずである。そうした意味で、第二言語習得理論の重要性に行き当たることは極めて自然なことであろう。また学校現場の研修会では、授業研究などの具体的な指導法について取り扱うことが多く、第二言語習得理論について学べる機会は多くないことも必要性を感じる要因となっている可能性もある。

設問(11)「学習指導要領解説はどの程度活用していますか」では若手教員とベテラン教員ではその扱いは全く異なっている。若手教員が「それほど活用していない」と回答したのに対して、ベテラン教員は「読み込んでいます」と回答している。学習指導要領は言うまでもなく英語の指導に関する国の基準であり、解説編はその詳細版と言える。しかしながら基準であるため、そこに記載されていることは極めて大枠的であり、日々の具体的な指導法に悩む若手教員の特効薬にはなりにくい。書店で販売されている具体的な悩みの処方箋となる指導法に関する書籍の方を読み込むということは理解できる。しかしながら学習指導要領解説は読めば読むほど気付きがあり、学習指導要領を原点としながら、他の参考書籍に当たるのが好ましいと言える。ベテラン教員は「指導案を書くときは必ず当たりますし、たまに振り返りもします」とも述べているが、自分の指導に不安が生じたり、内容の確認の必要が生じたときに目を通す、第一選択の書籍と考えるべきである。

７．おわりに

今回実施した調査の被調査者である若手教員とベテラン教員は、いずれも英語教師としての強い使命感と高い向上意欲をもった素晴らしい教員である。本調査から、若手教員からは、自分の英語力や指導力に今一つ自信がもてず日々悩みながらも懸命に努力を続ける姿が、またベテラン教員からは、現状に決して満足せず、変化し続ける英語教育を取り巻く諸事情に真摯に向き合う姿が見て取れる。筆者の使命はこうした志の高い教員を一人でも多く学校現場に送り出すことと、学校現場で日々子どもたちと向き合い、奮闘している教員を支援することであると考えている。そのためにも現場の教員の意識を共有し、未来の教員である学生に伝えていくことが必要である。本研究は、被調査者 A 及び B を加え、2024 年７月から８月にかけて対面インタビューを実施した上で、考察を深める予定である。

８．参考文献

白井恭弘（2015）「コミュニカティブな第二言語教育とは何か」『コミュニカティブな英語教育を考える 日本の教育現場に役立つ理論と実践（上智大学 CLT プロジェクト・編）』アルク

藤田保（2015）「はじめに」『コミュニカティブな英語教育を考える　日本の教育現場に役立つ理論と実践（上智大学 CLT プロジェクト・編）』アルク

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語編」開隆堂